
銀色

蘿蔔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色

【Nコード】

N8697X

【作者名】

蘿蔔

【あらすじ】

いつも通りの万事屋に真選組がやってきた。そして銀さんは子供に!?

更新は遅いです 初めてなんでよろしくお願いします

コメディークかこうとしてもシリアスになること多いんで、シリアス多めかもしれないけど違うかもしれない
だって銀さんの過去話だもん

第一話 え、嘘おおおおお!? (前書き)

始まりました

下手ですが

よろしくお願いします

第一話 え、嘘おおおおお!?

第一話 え、嘘おおおおお!?

ここは江戸〜〜かつては侍の国だったらしいよ〜

今から、その江戸の一部分お見せしまーす

??????

雨の降る夜

薄暗い夜道で女が一人で歩いていた

その女に近づく一人の男の影・・・

そして女が男に気づいた瞬間

ザシュツツツ

女の悲鳴とともに女は切り殺された

男は狂ったように笑っていた

???????

と、まあ一部分お見せしました、はい、愉快的歌舞伎町分かってくれたかな〜

「いや、分かるかアアアア

え、何が愉快？ 人死んだよね？愉快なところなんてみじんもないよね」

うるさいです新八^{駄眼鏡} お前黙ってるお前の動きは俺にゆだねられてんだ出番消えるぞ（怒）

お前のせいで言葉づかい狂っちゃまったじゃねーか よいしょ

てことで人物紹介 うしろで眼鏡がなんか言ってるけど無視しよう

「うるせーよ ぱっつあん

お前誰に喋ってた」

このやる気のなさそうな死んだ魚の目をしている男は坂田銀時
こんなんだが一応は攘夷戦争で白夜叉と呼ばれた男だ

「しよーがないアル

新八はツッコミにしか能のない男ネ
ツッコミはづるさくて当たり前ヨ

この女の子は神楽

実は宇宙最強戦闘民族の夜鬼である

そのため食べる量は普通の人より多く強いのだ

それでは本題に戻るとしよう

後ろで駄眼鏡が「僕はああああ!？」とか言っているがあいつはただの眼鏡なのだ紹介するところがない

さて、さっきの話は真選組がもうすでに解決したのだが
厄介やっかいなのはここからである

ピンポーン

「あ、銀さんインターホン鳴りましたよ」

「あーどうせ新聞かなんかだろ
でなくてもいいだろ」

「依頼だったらどうするんですか?」

「駄眼鏡新八こんなところに依頼なんか来るはずないネ ほっとくヨ
ロシ」

「ああ、まあ飲めや」

そう言って土方はいちごミルクをコップに注いだ

「うん、ああ」

銀時は迷うことなくそれを飲み干した

すると土方と沖田はニヤリと悪趣味に笑った

「おいおい、なんだよ

んで、依頼って何なの？

って、あれ？」

「銀さん…?
銀ちゃん!？」

「なんだよ!？」

「どうなってんだ!？」

「人切り事件の犯人が天人でな」その天人たちのアジトを検挙したら薬が出てきたんでさあ」

おい総悟、俺の話をさえぎるんじゃないやねえ　まあ、てことでお前に
試してもらおうって事になったんだがな」

「ふざけるよおおおおお！？」

あれ、なんか意識が・・・」

銀時は薄れゆく意識の中で、こいつら覚えてるよ、と思いました・・・
・あれ、作文？

??????

「銀ちゃん　銀ちゃん」

銀時は目を覚ました、それも子供の姿で
だが小さくなった銀時が言った言葉は思いもよらぬものだった

「ん、あれ、お前ら誰？」

「へ、銀さん？」

動揺している二人に土方は言った

「しよーがねえよ

俺もアイツがどうなっているのかは知らねえが、天人の薬を飲んだんだ

ああなるのも分からなくはねえ」

「はい、そう……ですね……」

それをじっとみていた銀時は

「ねえ、ここどこなの

んで、さっきお前ら誰って言ったんだから答えろよ
ていうか、俺の刀どこ行った？」

「銀ちゃん、はい、コレ銀ちゃんの木刀アル
それと私は神楽ネ んでこの眼鏡は新八アル
この二人は真選組のニコ中マヨとサドアル」

「ふーん

どーでもいいんだけど、俺が持ってたの木刀じゃなくて真剣なんだけど

それに俺、名前無いから、銀ちゃんじゃねえし
ていうか、俺、戦場にいたはずなんだけど」

その言葉に全員が目丸くした

「「「「せ、戦場おおおおお！？」

それに真剣って「「「「

「お、お前何してたんだ」

その質問に銀時は

「ん、何って俺を殺しに来た奴らとか、戦場の奴らとか殺して身はぎしてたけど」

銀時は頭をワシヤワシヤかきながら

「ーでもしなきゃ生きていけないんだもんなーと言った

そして、急に真剣な顔になって

「お前たちも殺ろうと思えば殺れるんだからな」

と、言った

その紅い瞳はひどく恐ろしかった

神楽たちはただただ驚いているしかなかった

第一話 え、嘘おおおお！？（後書き）

ちなみにコレ2回書き直しました

一回目は間違って短編にしまったので

二回目はデータが消えたので

わし、初めはDグレと銀魂にしようと思ったんですがわしには難しすぎました（ノアが・・・）」

まあ結局下手ですけどね

第二話 友達は迷惑かけるもんだ（前書き）

前回のお話

小説本文にも書いてありますがここにも詳しく

銀さん真選組に天人の薬を飲まされ
屍を食らう鬼に戻っちまいました

「これも地味に雑じゃね？・・・」

タイトル変じゃね？

第二話 友達は迷惑かけるもんだ

前のお話

銀さんが天人の薬飲んで小さくなった。

終

わり

「すっごい雑だなあ、おい！」

第二話 友達に迷惑かけるもんだ

土方と沖田は万事屋から出て（何とか抜け出して）いた。

「（あれは過去の万事屋だ・・・」

あいつは・・・いったいどんな過去を背負ってるって
いうんだ）

総悟、お前はあれ見てどう思った？」

土方が沖田の方を見ると沖田は・・・団子食べていた

「むふおっ？」

「危機感ねーなお前は危機感いるのか知らねーけども、てかどっかに
あつたんだその団子」

ゴクン

沖田は団子を飲み込み

「そうですねい

　　ありゃあ、旦那の過去ですよない」

　　土方の質問を無視して進める

　　土方も質問がなかったかのように・・・

「やっぱり総悟もそう思ってたんだな」

「旦那が攘夷戦争に出てたのは知りましたがけどね・・・

　　あれは・・・何なんでさあ？」

あの殺気はそんじょそこらの攘夷浪士よりも鋭かったのだ

　　だがあの少年はまだ十歳にも満たないのだ

「・・・山崎に調べさせるか・・・」

　　沖田等は疑問を感じながらも真選組屯所に戻ることにした。

??????

　　ところ変わって気まずーい万事屋

　　神楽と新八は沖田たちに対し”アイツら逃げやがって・・・”とか
　　思っていたが

　　今はそれどころではない

　　早くこの気まずい空気から抜け出したいのだ

「あ、あの、ぎ、銀さん？」

「だーからあ銀さんじゃねえってんだろ！」

「じゃあ、なんて呼べばいいアルカ？」

銀時に10くらいのダメージっぽいもの・・・ダメージ？

そう銀時に名前はない(ここで銀時と呼んでしまっているが)

ただ、今呼ばれている、屍を食らう鬼は名乗りたくないのだ

銀時はしぶしぶ

「じゃあ、銀ちゃんでもいい

でもそれあだ名でしょ、本名何なの？」

「ああ、それはさく「坂田銀時ネ！だから銀ちゃんヨ！」

神楽ちゃん？最後まで言わせて！？」

「ふーん」

.....

沈黙

「(沈黙 じゃねえええええ、気まずい誰か、誰かこの空気を救つてくれええええええええ)」

その時！

勇者？が現れた！

ピンポーン

「「「」」」

ドダダダダダダダダダダダダダダダダ

「「「ようこそアルウウウウウウー!!」(ようこそいらっしやいましたあー!!)」」

「お、どうしたのだ?何かあったのか珍しいことをしてくれるではないか」

「「桂さん!ツラ!」」

そう!勇者?とは桂ツラだったのだ!

???????

「な、どういうことだ!リーダー、新八君!」

さっそく桂はあわてておりました。

「だーからー銀ちゃんが真選組のサドとニコ中マヨに薬飲まされてちっさくなったって言ってるネ!」

「そうか・・・」

ぎ、銀時?」

「ん？、何なの？」

「ってかまず自己紹介しろよ・・・」

「あ、ああすまなかった

俺は桂小太郎だ「ツラって呼べばいいネ」

ちよつ、リーダー余計なことを！

というよりも服を着せてあげたほうがいいのではないか？」

それもそうである

銀時は突然体だけが小さくなってしまったため

服がいつもの着流しのままダボダボなのである（想像したら可愛いかも・・・）

てかよくこれでシリアスやってきたな・・・ オイ

「じゃあ僕は家に戻って

服を取ってきますね」

「ああ、俺はここに残って銀時が飲んだ薬がどのような薬なのか、分かりそうな奴に連絡を取ろう」

桂はそういつてケータイを取り出し
電話をかけた

「もしもし

「ツラじゃない！桂だ！

ところで お前今日中にこっちに来れるか？

銀時が薬を飲まされて小さくなってしまったのだ
お前ならその薬がどんな薬か分かると思ってたな

ああ、助かる、すまないな」

「ツラア誰に電話したアルカ？」

「まあ、もうすぐ来るはずだ」

ガララ

「取ってきましたよー」

「……………少なくとも新八君のように地味な登場はしない」

「それどういうことだアアアアアアア！？」

なんだ？ 僕帰ってきちゃいけなかったか？」

「いやそういうことではないぞ」「そうアル」

リーダーそう言っではいけないぞ」

「やっぱりそうなのかアアアアアア！？」

「うるさいネ新八

黙るヨロシ」

その時

ズガアアアアン

万事屋に宇宙船落ちてきました
万事屋、五分の一破壊されました。

漫画やらなんやらの法則で次話はちゃあんと直っております

第二話 友達は迷惑かけるもんだ（後書き）

下手ですんません

投稿遅くてすいません

次回はあの人が登場します

誰か分かりましたか？・・・

今回はギャグでしたシリアス多めって言ってたけどどつななるだろう？

第三話 題名思い浮かばないから「」で題名でいい？(前書き)

「なんなの今回の題名」

いや〜題名思い浮かばなくて

前回のお話

ツラが来て

宇宙船落ちてきた

「やはりこれも雑ではないか・・・」

まあ、じゃ始まり始まり〜

第三話 題名思い浮かばないからコレ題名でいい？

前回のお話

なんか友達いろいろ来た

「だから雑だと言っているだろうっ！」

第三話 題名思い浮かばないからコレ題名でい

い？

万事屋では

フルボッコにされた坂本が正座をしておったような・・・

(なんで昔話風?)

「アツハツハツハツハ」

すまんの〜

それで小さい金時はどござよ〜？

そういつて辰馬はあたりを見回していると
神樂が

「銀ちゃんは着替えてるネ!

もつすぐ来るはずヨ!」

ガラリ

扉が開き銀時が出てきた

「これでいいの？」

「「「「（かわいい・・・・・・・・！！！！！！）」」」」

袴？と、言うのかわからないが

それを来た銀時はそれはそれは可愛かったそうな・・・・（だからな
んで昔話風？）

袴？に着替えた銀時はさつき落ちてきたこの人を

誰？（半分は不審者）と思っていた

「ねえ、こいつ誰？」

「ああ、こいつは坂本辰馬と言ってな」

「能無しの馬鹿ヨ」

「ふーん」

それを見た辰馬はニヤリと笑うと

「この薬は・・・」

アツハツハツハツハツハツハ

これは楽しみじゃき

わしゃ〜今日はここに泊まらせてもらっせよ〜」

と勝手に話を進めていた

当然、神楽たちは話がなにも分からないわけで・・・

「オイ、勝手に話を進めんなヨ

こちとらなんも分かんないアル

それに

なんでお前なんか泊めなきゃいけないアルカア！」

そういつと神楽は辰馬にとび蹴りをくらわした

それは見事に辰馬の頭に直撃した

「ゴハア

ままま、ちよっと待つぜよ

別にタダでとは言ってないぜよ」

そう、みなさんご存知の通り辰馬はかの有名な貿易会社
快援隊の社長である

そのため金には困らない

するつてえと辰馬がいれば卵かけご飯TKGよりいいものが食べられる・・・
はずなのだ

まあ、そうとわかると

そりゃ、いいもの食べたいわけで・・・

泊まるのを承諾したわけである

ま、この話はどうでもよく

「ところで銀時の飲まされた薬は何なのだ

お前のあの様子を見ると危険はないようだが・・・」

「ん〜そうじゃのう」

辰馬はニカリと笑い

「この薬は金時が一日ごとにどんどん大きくなっていくんじゃ

明日は、えっと・・・松陽先生、だったかのう？

その人といった時の金時になるんじゃ・・・」

「そうか・・・

まあいい

町探検でもせぬか？俺たちが案内する」

「それはいいですけど・・・桂さんあなた指名手配犯じゃないですか」

新八がそういうと

「大丈夫だ、変装する」

「・・・そうですか」

「うむ、それでは着替えてくる、待っていてくれ」

そう言っつて桂は出ていきました

??????

「ただいま」

桂はヅラ子に変装していた
確かに桂はもともと女のような顔なのだ、これならばれることはないだろう

「ただいまつてここはあなたの家じゃないんですから・・・

・・・それなら、大丈夫ですね

「じゃあ行きましょうか」

「・・・・・・・・オカマ（ボソ）」

「ん？銀時何か言っただか？」

「・・・・・・・・何も」

そうして銀時の歌舞伎町探検が始まるのだった

第三話 題名思い浮かばないからコレ題名でいい？（後書き）

「ところでいつも雑だっけ言ってるやつ誰なの？」

私たちじゃないわよね？」

「あ、それは前回は銀時さんで今回は桂さんらしいですよ」

「ちなみに次はs」「あわわ！そこまで言っちゃだめですよ遊馬さん
！」

「ん、そうだな

それでお前坂本辰馬のファンなのか？」

「そうよ、だって可愛いじゃない由利にそっくりで

「確かに……そうだな……」

「……………」

てことでお開きです」

見てくださってありがとうございます

第四話 町探検と言っても全然らしいことやってねえ！（前書き）

今回すっごいグダグダですぜ！

画像輸入したぜ！

「下手だけどな！」「」

前回のお話

みんな来て

歌舞伎町探検することになった

「本文のよりましじゃあ
アッハッハッハッハ」

第四話 町探検って言っても全然らしいことやってねえ！

前回のお話

ゴタゴタしてた

「どンドン雑になってきちよるのう…」

第四話 町探検って言っても全然らしいことやってね

え！

銀時たちは言った通り外に出ていた

そして、その銀時の手には持ちきれないほどの……おかし
・

なぜかって、それは銀時が可愛いからに決まっているじゃないです
か

うん、痛い痛い！

だが、これはあながち間違いではなく

街のみんなは小さくなつた銀時を見るや否や「かわいい〜」と声を
そろえて言ってくるのだ

だが肝心な銀時は人に慣れていないため少し動揺したような迷惑そ
うな感じだ

そしてそこに

冴えない眼鏡の姉

お妙さんが現れた

その下にはストーカーゴリラが引きづられている・・・まだ、かろうじて息はあるようだ
そしてお妙さんは銀時を見るや否や

「新ちゃん、その銀さんによく似た子誰？銀さんの隠し子？」

・・・うん、まあこれを見て銀時の隠し子と思うのも無理はない
なかっただけか？

それは銀時はもういい大人 まるでだめなオッサン マダオなのだから

「違いm「違っぜよ」これは正真正銘本物の金時ぜよ」

「だけど今は昔の銀時に戻っちゃったのよ」

「あら、そうなの
かわいいわね」

「アネゴ
それ死んでるアルカ？」

そう忘れ去られていたが（新八もまだ」を閉じてもらっていない
ことにお気づきだろうか）
ストーカーゴリラがいたのである

「「ちょうどいいおもちゃになるわねあげるわ
神楽ちゃん」

ゴッ！！

何か音がしたってそれは神楽がストーカーゴリラの を蹴った

んだよ

だが、そのおかげでストーカーゴリラは目覚めました！。
ちなみにすっごい偶然 無理矢理に
沖田達も銀時たちの所にいらっしやいました。

「てめえら、近藤さんに何やってんだ！」

「ふふ、あなたの所の局長さんは懲りずに私のストーカーをしてきたんで

殴ったまでですよ」

「「「「「・・・（アツハツハツハツハ）」「」「」

まあ、そんなこんなで一日が終わりい

・・・夜が来ました。
んで、みんな帰りました

「さてと、今日は一応僕も泊まりますね
坂本さんと神楽ちゃんとだけじゃ銀さんが心配だし。」

「アツハツハツハツハ
そんな心配いらんき
ほれ、ちゃんと酒m」「なんで酒だアア！！！！」「」

「だから心配なんですよ！！アンタは！！！」

「・・・ねえ、腹減ったんだけど」

「あ、それじゃあ作りますね」

うん、坂本が来たから

魚、味噌汁、ごはん、卵焼き・・・ってあれあんま変わってなくな
い???

いーえ変わっているんです。魚が金目鯛になってんスよ!!

と、まあそんなこんなで

子供はランラン寝る時間〜

「（明日は、どんな銀さんなんだろう?・・・）」

「（銀ちゃん可愛かったネ

明日が楽しみネ）」

「（松陽先生・・・と過ごしてた金時か・・・

楽しみじゃのう）」

「（・・・たの・・・し・・・かった・・・かも・・・）」

それぞれ思いを抱えての就寝・・・なり・・・

第四話 町探検って言っても全然らしいことやってねえ！（後書き）

皆様このグダグダを見てくださりありがとうございます

さて皆様お楽しみ輸入画像でございます。

「してるやついるのか・・・？」

「下手ですが

見てください」

> i 3 4 6 3 5 | 4 3 5 8 <

下手ですいません

銀さんです

なんか変です

ありがとうございます！！

第五話

たくさんの人の中に一人でも知ってる人がいたら落ち着く（前書き）

今回はいつもに増してグダグダだよん

前回のお話

町探検をしたって言うてるだけでらしいことしてないからね！

「まえの題名と同じようなもんアル！」

第五話 たくさんの人の中に一人でも知ってる人がいたら落ち着く

前回のお話

町探検した

「雑アルナ、このバカが!!」

第五話 たくさんの人の中に一人でも知ってる人がいたら
落ち着く

〜朝〜

「ふぁあ〜あ

おはようございます

坂本さん早いですね」

「おはよう

おんしも早いのお〜」

二人は神楽と銀時を起こしに行った

坂本は銀時、新八は神楽を

予想がつくように

新八は神楽にこっぴどく殴られたのである

坂本の方は

「金時いー起きちよるかー!!」

金時―

「んーうるせえなーツラア

日曜日は昼まで寝てていいって決まってるだよ」

「そう言わんと起きろー

金時―

「うるせえってんだろがアアアア!」

「いぶえ!」

銀時の蹴りにより

坂本は吹っ飛んでいきました

「…………あれ、誰だ? ……コイツ

…………てかまずここ…………どこだ?」

「坂本さん

「銀さん起きましたか? ああ、起きてる。ってあれ、坂本さん!」

「あたた

痛いぜよー金時いー」

「…………あのー悪いんだけどお前等誰?」

…………

「あー、そうでしたね!

僕は志村新平「こいつは眼鏡ヨ！！私は神楽アル！！！！」
「・・・・・・・・（あえて何も言わない）」

「わしは坂本辰馬言うんじや
よろしくのう金時！！」

「惜しい惜しいけど違う！！
俺は坂田銀時！！
でここどこだ！？」

「あ、ここは江戸の歌舞伎町ですよ」

「ん！？え！？
江戸お！？

「なんで！？俺、萩にいたはずだよな！？
え、松陽先生は！？」

「・・・・・・・・えーつと・・・・・・・・それは・・・・・・・・」

ガララ

戸をあけて誰かが入ってきた

「新八くん
開いていたので入らせてもらったぞー」

入ってきたのはツラこと桂小太郎だった

「桂さんアンタ勝手に入ってこないで下さいよ・・・
で、何の用なんです？」

「いや、俺は小さくなった銀時を見に来たんだ
銀時ーいるか 銀時」

「ん？その声はヅラか？

お前風邪ひいてんのか？ちょっと声変だぞってエエエエエ！？」

銀時はものすごい奇声を万事屋に響かせた・・・

「おっ、おまつ、お前、なっ、でかつ！！」

「ん、銀時ちっさいな」

あの頃そのものだ！あ、その時の銀時なのか・・・

「なにどしたの！？」

え、俺か？俺がなにかおかしいのか！？」

「この銀ちゃんノリ今の銀ちゃんそっくりネ！」

「・・・そうですね！昨日とは全然違うな・・・」

「アツハツハツハツハ」

「なにが！？」

てかヅラがでかいのはなんで！？」

「知らん！」

「「「ええ！？」」「」

あまりに適当な返事に銀時はおろか新八、神楽までもが声を上げた

「まあ、いいではないか」

ここまでではうまくはぐらかした・・・つもりだったが

「ねえ、ちょっとちょっと

お前がツラなら晋助は？松陽先生は？」

銀時はもっともな質問をしてきたのだ

「うっ・・・それは・・・」

「アツハツハツハツハツハ

あの二人は出かけたぜよ」

「」（ナイスフォロー坂本！）」「」

辰馬は見事なフォローをした、が

銀時はすごく不機嫌だった

「晋助だけずるい

帰って来たら思いっきりからかってやる！」

銀時はムウツと頬を膨らました

それはとても微笑ましく可愛かった

「銀ちゃんかわいいネ！」

「ちよっ!?!」

可愛すぎる銀時に神楽は抱きついた
銀時は突然のことに驚いていた

「ちよっ離して!」

「いやヨー銀ちゃん頭モフモフアルー」

「ちよっ

ほんとに離してくださいーいっ!」

「あっはっはっは」

「ふっ

銀時無駄だリーダーは意地でも離れん」

「いつ!?!」

そんなー

てかヅラなんでこいつのことリーダーとか呼んでんの!?!」

万事屋ではあと三十分ぐらいこの騒動が続いたような・・・

第五話

たくさんの人の中に一人でも知ってる人がいたら落ち着く（後書き）

なぜかもっさんを早起きにしてしまったワシ
テキストにそうだったらしいなーみたいなの

さてと

今回もがっぞう

スローライフの方はコーナーだけどこっちはあるかないか分かんないし

あったとしても全然銀魂と関係なかったりするよん

じゃ

どうぞ

> i 3 4 7 6 9 — 4 3 5 8 <

これはマウスで書きました！

難しかった特に手が！！

「「「結局変だけどな！！」「」」

うん、そうなんだよー・・・頑張ったんだけど・・・

一応幼少期の銀さんのつもりです・・・

ありがとうございました！

あつかましいですが

感想・評価をいただきたいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8697x/>

銀色

2011年11月20日20時22分発行